

高温・少雨に伴う農作物管理対策について

気象災害対策H27-8
平成27年8月10日
農林総合研究センター

I 気象の概況

本県では、梅雨明け（7月21日ごろ）以降、高温・少雨の状態推移している。

特に、8月1日から9日までの最高気温の平均は、金沢では33.9℃（平年差+2.6℃）、輪島では32.9℃（平年差+2.8℃）で、降水量は、金沢、輪島とも0mmとなっている。

また、平成27年8月6日、新潟地方気象台発表の1か月予報においても、向こう1か月の平均気温は平年並または高い、降水量は平年並または少ないと予測されているので、今後の気象情報に注意し、農作物の適切な管理に努めてください。

II 当面の農作物管理対策

1 水 稲

- (1) 根の活力低下により、白未熟粒の発生が多くなるので、早期落水を避け、刈取り7日前まで通水を継続する。なお、入水間隔は1～2日おきにするなど、間断通水の間隔を短縮し、状況によっては、毎日でも入水する。
- (2) ポンプや水門などを止めず、用水供給期間を延長し、用水の確保を図る。なお、用水をため池に依存している地域では、集落や地域単位で計画的な水利用に努める。
- (3) 登熟期に高夜温が続く場合は夜間通水を行い、水分の補給と根の活力維持を図る。夜間通水や飽水管理は立毛中の胴割粒防止にも効果がある。
- (4) 高温登熟時に胴割粒が発生しやすい乾田地帯においては、高温条件下では毎日でも通水を実施し、作業に支障の無い限り落水時期を遅らせ刈取り直前まで通水する。
- (5) 高温時期の長期湛水は、根の機能低下をもたらすので行わない。
- (6) 強風・フェーン時は、特に通水及び保水管理に努める。
- (7) 高温年は、籾黄化の進みが早く、胴割粒が発生しやすいので、籾黄化率が80%から収穫を開始し、90%までに終える。高温の連続により登熟の進行が早く、積算温度のみの熟期判定では刈り遅れる場合があるので、籾や枝梗の黄化程度や籾水分を測定して収穫適期を判断する。

2 大 豆

- (1) 着莢期の乾燥は、落莢を生じて莢数不足となるので、9月上旬まで5～7日おきにうね間かん水を実施する。
- (2) かん水はできるだけ日中を避け、ほ場末端まで水が達したら直ちに落水する。水量が十分でなく、かん水に時間がかかる場合には、土を入れた肥料袋等で溝をせき止め、一畝ごとに通水するなどして、水口周辺の長時間の湛水による湿害を防ぐ。
- (3) 現在、ハダニ類及びカメムシ類の発生はやや多と予想されており、早期発見に努め防除を徹底する。

3 野 菜

(1) 共通事項

- ① 日中高温時のかん水はかえって根を痛めるので、地温の低い早朝又は夕方に行う。
- ② 土壌の乾燥により微量要素の吸収が悪くなるので、微量要素入り液肥を散布する。
- ③ 病害虫（ハダニ、アブラムシ、スリップス、シンクイムシ、オオタバコガ、うどんこ病）が発生しやすくなる。病害虫の発生に注意し早期防除に努める。なお、高温時の薬剤散布は薬害を起こしやすいので、朝夕の涼しい時間帯に散布する。

(2) 施設野菜（雨よけ栽培含む）

- ① 日焼けや葉焼けを防止するため、ハウスの屋根に遮光資材を被覆する。
- ② 敷きワラ、ポリマルチなどにより土壌水分の蒸発、地温上昇の防止に努める。
- ③ 収穫直前の小葉菜のかん水は日持ちを低下させるので収穫間際のかん水を控える

(3) 露地野菜（なす、ねぎ、だいこん、キャベツ、はくさい、ブロッコリーなど）

- ① 夏秋なすは、必要に応じて摘心、摘葉、摘果などを行い、草勢の維持に努める。
- ② だいこんは、播種後、種子への水分供給を促進するため鎮圧を行う。
- ③ キャベツ、はくさい、ブロッコリーの移植作業は植え傷みのないように夕方に行い、移植後のかん水は十分に行う。
- ④ ねぎは気温が平年並みとなるまで土寄せを控える。

4 花 き

(1) 施設切り花（ストック、切り花葉ぼたんなど）

- ① 遮光率40%程度の遮光資材を張って施設内の温度を下げる。
- ② 出入り口のビニールをはずして風通しを良くする。この場合、害虫が侵入する恐れがあるので、防虫ネットを張る。

5 果 樹

果樹では、高温（干ばつ）被害は全ての樹種で発生し、著しい場合は果実の萎凋、樹体の枯死に至る場合があるので、樹体管理を含めた総合的な対策を実施し、被害の軽減を図る。

(1) 樹体管理

- ① 樹体からの蒸散を抑制するため、無駄な徒長枝・発育枝は切除する。
- ② ぶどう、もも、なし等の収穫は午前中の涼しい時間帯に行い、高温による果実軟化の発生に十分注意する。また、高温で熟期が急激に進み果肉の軟化を招きやすいので、熟度のチェックを十分に行い、適熟果の出荷を心がける。
- ③ 高温条件下ではハダニ類やヤガ類などの害虫が発生しやすいので、発生動向に十分注意し、適切な防除を心がける。なお、高温時の薬剤散布は薬害を起こしやすいので、朝夕の涼しい時間帯に散布する。
- ④ 強い日差しから樹体の日焼けを防ぐため、主幹、主枝、亜主枝を対象に石灰乳などの保護剤を塗布する。
- ⑤ ハウス栽培のぶどうやいちじくでは、ハウス内の換気が十分行われるようサイドビニールを撤去するとともに、ハウスのつま面を開け、通風を良くする。
- ⑥ 早生～中生種のりんごでは、日焼けが発生しやすくなるので、寒冷紗等による日よけ等の対策を行う。

(2) かん水

- ① かん水施設がある園では、5～7日間隔で、1回約20mm程度を目安にかん水する。
- ② かん水施設がない園では、少量の用水で効果があげられるよう簡易点滴かん水等を行う。

(3) 土壌管理

- ① 園内雑草の過繁茂は、水分競合を招くことから、草丈20cmを目安に除草し、刈草は樹冠下にマルチする。
- ② 土壌からの直接蒸発を回避するため、土が露出するような極端な除草は控える。
- ③ ほ場内の乾燥しやすい場所や根の浅い場所を優先し、敷きわらや敷き草等を行い、土壌表面からの水分蒸発を防止する。

6 畜 産（暑熱時の家畜の管理）

(1) 暑熱時の家畜の管理は、家畜の体温を平常値に近い状態に維持することである。

(2) 毛刈り

- ① 牛体の毛刈りをすると体表からの熱放散がスムーズになるので、熱発生量の高い高泌乳牛、泌乳ピークを迎える牛、夏に分娩する予定の牛を優先的に毛刈りす

る。

- ② 全身の毛を短く刈るのが理想であるが、全身が無理な場合は、首から肩にかけて毛刈りする。

(3) 送風

ファンを使って牛体に直接風を当て、体感温度を下げる。特に、よく汗をかく首から肩へ風を当てると効果的である。

(4) 畜舎内の対策

飼育密度の緩和や畜体等への散水・散霧により、家畜の体感温度の低下を図るとともに換気扇等による送風、換気を行う。体感温度の低下方法は、扇風機とスプリンクラーを使用して冷やす直接的蒸発クーリング法と、噴霧器などで大量に霧を発生させ、これを気化させて体感温度を下げる間接的蒸発クーリング法がある。いずれの方法も、牛舎内湿度が上がりすぎないように注意する。

(5) 畜舎外の対策

寒冷紗やよしずによる日除け、屋根裏への断熱材の設置及び屋根への消石灰の塗布等、畜舎環境の改善を図る。

Ⅲ 気象の概況

北陸地方 1か月予報

(8月8日から9月7日までの天候見通し)

平成27年8月6日
新潟地方气象台 発表

<予想される向こう1か月の天候>

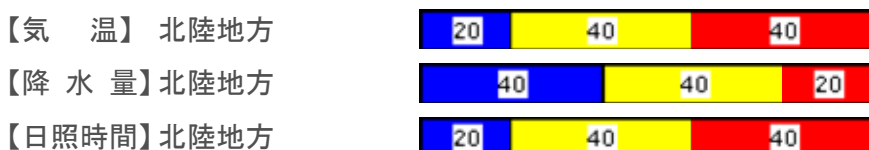
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

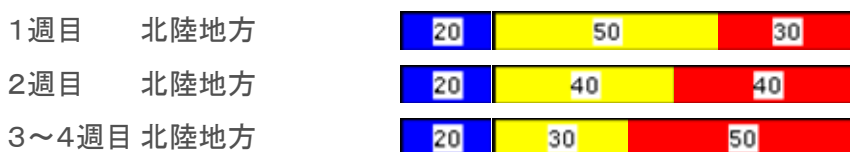
週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>



凡例: 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

<気温経過の各階級の確率(%)>



凡例: 低い 平年並 高い

<予報の対象期間>

- 1か月 : 8月 8日(土)～ 9月 7日(月)
- 1週目 : 8月 8日(土)～ 8月14日(金)
- 2週目 : 8月15日(土)～ 8月21日(金)
- 3～4週目 : 8月22日(土)～ 9月 4日(金)

<次回発表予定等>

- 1か月予報:毎週木曜日 14時30分 次回は8月13日
- 3か月予報:8月25日(火) 14時